

アジア研究センター共同研究

# アジアの社会遺産と 地域再生手法

レクチャーシリーズ

# 1

Kanagawa University Center for Asian Studies

社会遺産(social heritage)は、生まれたときにおかれていた社会的環境を指す用語である。社会遺産は主として人に対して使われることが多いが、地域や都市もそれぞれ社会遺産を有する。アジアの諸都市は、近代において似たようで異なる複雑な国際的背景の中でそれぞれ発達してきた。近年、アジアの諸都市では地域再生が活発に行われており、それら再生事例を対象とした研究も見られる。しかし、それらの研究の多くはガバナンスなど再生手法に関するものである。本共同研究では、それらの事例を「社会遺産」から見ることにより、その地域の歴史的・文化的・政治的文脈から重層的に分析することが可能になると考える。

共同研究では、アジア各地の地域再生事例とその周辺を対象としたフィールドワークをもとに検討を進める。2019年1月、タイ・バンコクにおける低所得者居住区の調査を実施した。2020年1月には中国・広州の客家調査を計画し準備を進めていたが、COVID-19感染拡大による渡航自粛から調査は中止となった。夏を過ぎても感染が治まる気配はなく、フィールドワークを手法とする私たちの研究は方向転換を余儀なくされた。一方で、オンライン授業などで導入したZoomといったオンラインミーティングシステムは、普段なかなか会えない海外研究者たちとの距離を縮めてくれる利点をもたらした。

そこで、2020年度後半から2021年度にかけて、アジアの都市・地域をフィールドにもつ研究者・実践者に登壇いただく連続レクチャー(公開講演会)を企画・開催することとした。リアルな場からデスクトップ越しのフィールドワークへの転換である。アジアの地域・都市再生事例の課題・背景を、社会遺産という観点から捉え、相互比較した上で、国際的討論を深めることを目指している。ここに収録された連続レクチャーの記録を通じて、再生手法としてのアジア的計画論について議論を深めるきっかけになれば幸いである。

神奈川大学工学部建築学科教授  
神奈川大学アジア研究センター所長  
共同研究「アジアの社会遺産と地域再生手法」代表

山家京子



アジア研究センター共同研究

「アジアの社会遺産と地域再生手法」レクチャーシリーズ

## Vol.1

---

# 客家の円型土楼

## — その建築様式と集住の知恵

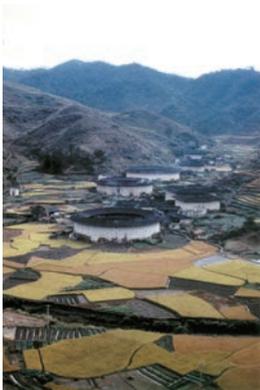
重村 力

(建築家・工学博士)

# INTRODUCTION

**重村** 本日発表するのはすごく古い調査で、1986年から88年にかけて行った円形土楼の研究です。今回のコロナ禍がなければ、内田先生や須崎先生、山家先生が福建省に行く予定だったと聞いて、ではその前に私の話を聞いてもらえたらと思い、今日こうしてZoomでお話することになりました。

この写真の中央に、UFOが3つ着陸したように見えているのが円形土楼[図1]です。私はずっと集合住宅を研究してきた者として、この円形土楼が何なのかということに大変興味を持ちました。



[図1]

# LECTURER



## 重村 力 (建築家・工学博士)

1946年横浜市生まれ。1969年早稲田大学卒業後、1970年象設計集団設立、現在Team ZOOいるか設計集団主宰。神戸大学前教授(現名誉教授)、神奈川大学前教授(現客員研究員)、台北市立大学兼任教授、アメリカ建築家協会名誉フェロー、日本建築学会名誉会員。主な著書に『図説集落』、『集住の知恵』など。日本建築学会賞受賞(論文)。主な作品に協町図書館(吉田五十八賞)、緒方中学校(日本建築学会作品選奨)、ひぼこホール(日本建築学会作品選奨)、弘道小学校(ARCASIA金賞)などがある。

# LECTURE

## 円形土楼との出会い

私が大連理工大学に行く前の1986年、当時京都大学人文科学研究所にいらした田中淡さんが、神戸市立博物館に招待され、中国の劉敦楨<sup>リウトン</sup>先生が書かれた『中国住宅概説』について講演されました。劉先生はそのとき既にお亡くなりになっていたのですが、講演ではこの本に載っているスライドがたくさん出てきて、四合院や三合院<sup>ヤオトン</sup>、窑洞については知っていましたが、客家円形土楼の非常に汚いモノクロの写真を見て、これはすごいなと思いました。本の中に円形土楼が出てきたのはわずか1ページだけでしたが、集合住宅だと聞いて驚きました。そこでは共同生活をしているのかとか、いろいろな質問をしましたが、劉先生すら行ったことがなかったそうです。写真は1950年頃に劉先生の大学の学生が撮ったものでした。だから、「もし重村さんが興味を持っているなら、ご自身で行かれてください」と言われました。

以前、天津大学の聶蘭生<sup>ニエランション</sup>先生が、神戸大学に3年程いらしていました。聶さんは劉敦楨さんと同じ南京工学院のご出身です。

楊廷宝<sup>ヤンティンボウ</sup>というすごい建築家がありますが、この人も南京工学院で教えていました。1930年代の中国には、北京の梁思成先生を中心とするモダニズム派、もう一つ、南の方に楊廷宝先生を中心とする、景観との調和をやや重んじる南京工学院のグループがいました。1930年代は盛んに活動していたのですが、1939年頃にはどちらもぱたりと素晴らしい業績がなくなってしまいます。なぜかというと、日本が侵略したからです。それらのグループが、戦後1950年代に共同研究室をつくりました。それが南京工学院と清華大学です。共同研究室では、中国の住宅に関する写真をたくさん集めてきて、中国の住宅は何なのかという研究を行いました。それは素晴らしい研究でしたが、それがまたぱたりと駄目になってしまいます。その原因は文化大革命<sup>※1</sup>です。文革のために研究ができなくなりました。

※1 中国で1966年から76年まで続き、1977年に終結宣言がなされた、毛沢東が復権するための文化改革運動を装った大規模な権力闘争。

## 大連理工大学 建築学科の設立

僕は1980年にハルビン工学院に行くようになりました。1980年代には日中の教員・学生交換が始まりました。聶蘭生先生が神戸大学に来られたのもこの頃です。1980年代は文革が完全には終わっていないけれど、そのように徐々に日中間の交流ができてきました。

そのタイミングで、南京工学院出身である聶先生から「重村さん、1年大連に行ってくれないですか」と、大連工学院への招聘の依頼がありました。ですが、当時講師をしていた神戸大学に1年間もいなかったら座席がなくなってしまいますと言ったら、では半年でもいい

から来てくださいと言うので、大連に行きました。

依頼内容はハルビン工学院と同じで、ロシア経由のボザール型の教育をする人たちが土木に集められたんです。それでこの土木から建築学部のプログラムを作り、教えることになりましたが、大連で教えるのには苦労しました。そのときの僕の助手は、今では大連理工大学の幹部になっています。

建築のクラスはこのような感じで、実に貧しいです[図2]。この1部屋しかありません。しかしすごいと思うのは、この1つの製図板で、構造の勉強もすれば建築計画の勉強もして、図面も書きます。

最初に僕が教えていた頃は、週に2時間ぐらいしか建築のデザインを教える時間がなく、あとは病院とは何かだとか、動線とは何かだとか、そういうことを教えていました。こんなペースでは図面など書けるようにならないのではないかと考えていたら、ある段階でばさっと全部の授業をやめました。要するに3週間ぐらい、デザインや設計以外のあらゆる講義をやめてしまいます。モジュールカリキュラムです。そうすると、ここで学生は製図板にへばりついて図面を完成させていきます[図3]。みんな水張りをして、墨入れをして、すごくきれいな図面を書きました。こういうカリキュラムの組み方は医学部にはあるようですが、すごいいいなと思いました。

僕は60人ぐらいのエスキースを全部頭に入れながら教えていました。最初は英語の上手なおばあちゃん先生がいて、僕が話した英語を中国語に訳していましたが、さすがに全てを英語でやるのは大変だと思いました。そうしたら、隣の大連鉄道学院という学校に、朝鮮語と日本語がうまい朝鮮系中国人の先生がいることが分かりました。この先生に僕が日本語でしゃべって、中国語に通訳するようになりました。しかし、結局は個人個人との会話になりますから、中国語を覚えないと仕方ないと思いました。平面はいいけれども断面が悪<sup>ビンメンハオ、ボーマンブーハオ</sup>い、「平面好、断面不好」とか、君にはもう少し努力が必要だ、「你要努力<sup>ニャオヤヌーリー</sup>」とか、そういう中国語からだんだん覚えていきました。

ここで育った人は、街のうわさで聞けば、みんな出世しているようです。



[図2]



[図3]

## 大連の街と建築

ここで大連の街を少しだけお見せします。これは、主にロシアがつくった古い大連の街と、日本がつくった大連の街とをつなぐ、勝利橋<sup>スンビージャオ</sup>という橋で[図4]、その下に南満州鉄道が通っています。素晴らしい建築です。戦前は日本橋と呼ばれていて、今は勝利橋と呼ばれています。

この下を、鉄道オタクならよく知っている「あじあ号」などが通っていました。当時日本では1986年には国鉄のデゴイチ(D51形蒸気機関車)が走っていました[図5]。だからもうわくわくするような空間でした。鉄道線路のレールは広軌でした[図6]。

それでロシアがつくった街の方を見ますと、ドイツのゼツェシオン<sup>※2</sup>の影響を受けたロシアの建築が建っていました[図7]。これは満鉄の図書館になった建物です[図8]。この中に安井武雄が設計した建物を見つけて、安井建築設計事務所に教えたことがあります。

これは満鉄本部のあった建物で[図9]、今は博物館になっています。これは満鉄の幹部が住んでいた家[図10]、素晴らしいでしょう。ドイツでいえばユーゲントシュティール<sup>※3</sup>というデザインです。

このように街がありますが[図11]、今はもうぼろぼろになっているようです。集合住宅も素晴らしいです[図12]。こういうところに日本の幹部が住んでいました。だから多分、日本がつくったものです。

中でもとりわけすごいなと思ったのは、当時、大連から横浜まで、あるいは大連から神戸に船が出ていたのですが、その栈橋兼鉄道乗り場です[図13]。これが素晴らしい建築で、恐らくこのオーダー<sup>※4</sup>にもっとふさわしいデザインがコーニス<sup>※5</sup>としてあったのだと思いますが、壊されてしまったそうです。中はガラス張りで素晴らしい建築です。内側から街を見るとこのようになっていて、中央郵便局がありました[図14]。これが栈橋の中のトップライトのある空間です[図15]。

この近くに大連駅があり、東京駅と似ているということで、映画『ラストエンペラー』の撮影が行われました。これはジョン・ローンで、裕仁役の人は三井物産の社員ですが、僕はこの辺にいる日本の将軍です。キャスティングディレクターの女の人が日本人を一人一人見て行って、僕はすごく戦前の日本人男性の顔をしているということで出演することになり、きちんと出演料もいただきましたが、この場面はカットされています。これはジョン・ローン、坂本龍一、ベルトルツ監督です[図17]。かっこいいですね。この人たちと1週間ぐらい共同生活をしました。

※2 「分離」を意味するドイツ語で、19世紀末、ドイツ・オーストリア各都市に興った絵画・建築・工芸の革新運動。過去の芸術様式から分離して、生活や機能と結びついた新しい造形芸術の創造を目指した。

※3 19世紀後半から20世紀の初めにかけてヨーロッパを席巻した新芸術様式。

※4 ギリシャ・ローマ建築における柱と梁の関係を規定する規準。

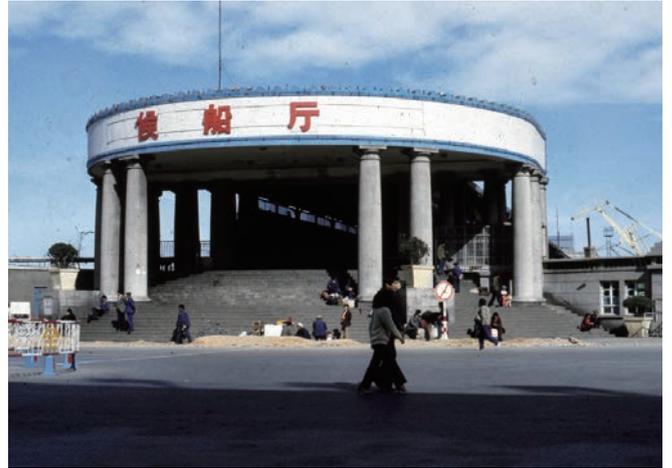
※5 建物あるいは壁を完成させる水平にかたづけられた突起部。



【図4】



【図5】



【図13】



【図6】



【図14】



【図15】



【図7】



【図8】



【図9】



【図10】



【図16】



【図17】



【図11】



【図12】

### 廈門を経て永定県へ

話を戻すと、聶先生から依頼があったとき、僕は「大連に建築学部をつくることに協力するので、夢にまで見た円形土楼を見に行かせてください」とお願いしました。しかし、いろいろな申請をしても、円形土楼のある福建省永定県の旅行許可は下りませんでした。まだうまくいきませんだとか、連絡がつかませんだとか、許可が出ませんと言われ、次から次へと断られてしまい、どうしたらいいか、いろいろな先生に相談しました。中国の先生たちとだんだん仲良くなると、どうやって社会主義の中国を生きていくかを助言してくれるようになりました。僕は、中国政府教育部、日本でいうところの文部省が発行する「外国人専門家工作証」を持っていました。これがあれば殺されることはないだろうと思って、現地に行ってしまうということになりました。

当時は「萬元戸」といって、年に1万元稼ぐ家はすごいと言われていましたが、僕は2万元ぐらいの給料をもらってました。だから、毎月千何百元のお金を受け取っていましたが、外貨兌換券という特殊な通貨なので使いようがありません。それを全部ポケットに入れて、<sup>アモイ</sup>廈門に行きました。

当時、早稲田大学から上海の同済大学に留学していた山口幸男という人がいました。それから、私の研究室にも同済大学から来た<sup>ルンミン</sup>盧辛明という学生もいたので、日本の学生はみんな上海に集まってもらうことにしました。それで盧辛明、伴文正志、米須正明、福井辰治、それと山口幸男と私の6人が上海で作戦会議をして、廈門に行きました。

これがまた面白かったのですが、朝6時頃に空港に行って、8時の便に乗ろうとしたのですが、夕方の4時になっても飛ばないのです。乗る予定だった中国民航の機体の反対側にはCAACと書いてあります[図18]が、僕がいららしていることに気が付いた女の人が寄って来て、「あれを何と読むか知っていますか」と英語で聞かれ、「Civil Aviation Administration of Chinaでしよう」と僕が言ったら、「No, Chinese Airline Always Cancels」と言われ、大笑いしました。そういうふうに、みんな中国のまどろっこしさを楽しんでいるところが素晴らしいなと思いました。

それで廈門に行ってみると、昔フランスの租界<sup>※6</sup>だった街で、当時はまだ改革開放の前だったので、こういう汚い街でした[図19]。自動車はほとんどいませんが、自転車と人間とリヤカーがわいわいいて[図20]、なかなかいいなと思いました。食べ物もおいしかったです。

廈門では華僑大厦という宿に泊まったのですが、そこで非合法すれすれのことをしました。世界の華僑が泊まる場所ですから、いろいろな闇屋が集まってきます。ホテルの裏に行って、山口君が僕の外貨を高く人民元に替えました。それでもものすごい、持ちきれないぐらいの人民元ができてしまって、何しろ10元札しかありませんから。仕方ないからチョッキを買って、チョッキの裏にみんな10元札を入れて、何しろ危ないので、それを着たまま寝たりしていました。

次に、外国人に許可されていない地区に連れて行ってくれるドライバーを探さないと行けません。またそれを闇屋で見つけて、劉敦楨の文章に書いてある永定県という場所に向かいました。ちなみにそのドライバーは、僕らが行った後に土楼旅行社という会社をつくって成功し、幾つもビルを建てて、「重村さん、いつ来てもごちそうするよ」と言ってくれています。だから、僕は地域経済の役にも立ったのではないかと思います。

※6 清国(現在の中国)内の外国人居留地。



【図18】



【図19】



【図20】

### ついに永定県へ到達

永定県に入り、苦労しながら山の中を進んでいくと、土壁を突き固めた版築の集落が徐々に出てきました[図21]。それで、近づいている感じがして、どんどん街に入っていく、最初に出会ったのがこの集落です[図22]。香港にタイガーバームというメンソレータムのようなこう薬がありますが、そのタイガーバームで成功した胡さんの出身地です。胡という字は、虎という字と発音が同じです。それで「虎油」、タイガーバームという名前にしたそうです。

この集落の人と最初に仲良くなって、ここにある円形土楼を見に行けることになりました。こういう交渉を、盧辛明の上海なまりの北京語、それから山口君のめちゃくちゃな片言の中国語、それとドライバーの北京語から閩南語という福建省の言葉に変えて、その福建省の言葉からさらに客家の言葉に変えて話をしていましたが、なかなか通じません。すると、僕は祖父に教えられて少しか漢文を書けたので、僕が漢文で筆談する方が通じることが分かりました。その代わり、後で寄付の要請がたくさん来ました。



【図21】



【図22】

## 客家という民族集団

ここからようやく本題です。客家とは何かというと、中国ではいろいろな王朝ができます。例えば始皇帝が創立した秦や、あるいは善政をした周は、本当に今の漢民族の中心民族かどうかは分かりません。もう少し西の民族かもしれませんが、前漢・後漢の漢、その後に唐ができますが、唐の中心は漢民族です。ところがこういう人たちは、みんな北方ないしは西方から来る遊牧民系の人たちにいつも追われるという歴史があります。例えば漢は匈奴との戦いに敗れて滅びてしまうし、あるいは唐は安祿山の乱が起きて西の方から滅びていくわけです。遊牧系の民族が北から、西から、東からも来て、さらに金など旧満州吉林省の方からも来ます。そうすると、大体南に逃れます。だから、宋や明などの中心は、かなり南です。そういう南の方に、北から追われた人たちがどんどん入ってきますが、南は南で、呉越同舟の語源にもなった呉や越の先住民がいます。こうした先住民の中に、誇り高く、武力と先進知識を持った北の連中が入ってくるわけですから、大変な戦いになります。そういうことがずっと起きるわけです。漢王朝はBC(紀元前)とAD(紀元後)の間にまたがっているわけだし、清朝になると江戸時代から明治維新ぐらいまでずっと続いています。

そのようなわけで北から逃れてきて、先住民の中に島状に居住地をつくったのが客家です。北京語だとクージャと言います。

この人たちはどこにいるかというと、四川省、広東省、福建省、湖南省を中心に、台湾にもたくさんいます。団結心がものすごく強くて、勢力があって、軍事も強いんです。リーダーシップがあって、世界に雄飛して華僑になります。

著名人にはリーダーや革命家が多いです。例えば、洪秀全は太平天国の乱を起こし、キリスト教社会主義的な不思議な新興宗教をつくって、清を滅ぼしました。それから民主主義革命で清を倒した孫文もそうですし、毛沢東の八路軍で一番強かった朱徳將軍も客家です。それから、蒋介石や孫文の奥さんになった宋慶齡、宋美齡など、宋姉妹という3姉妹がいます。1人は大陸の幹部になり、1人は台湾の幹部になり、1人はアメリカにいます。この宋姉妹も浙江財閥ですが、客家です。

改革開放をやった鄧小平も客家ですし、それから台湾独立の道筋をつくって、今の政権の礎をつくり、この間亡くなった李登輝さんもそうです。それから、シンガポールであれだけ素晴らしい政治をやっているのは、李光耀というリーダーがいて、その後継者に呉作棟という人がいますが、この人たちも客家です。タイのタクシンもそうです。

こういう人たちが出る、特殊なという言い方は差別的かもしれませんが、そういうリーダーを生む民族集団というか、サブ民族といえますか、そういう人たちが客家です。平家の落人のような人たちです。

それで福建省の閩南の民との械闘をずっと繰り返します。械闘と

いうのは、武闘とも言えるのですが、道具を持って血みどろの戦いをすることです。この械闘は昔の話だろうと思ったら、1920年代、30年代までやっていたようです。ここでようやく話がつながりますが、だから土楼のような防衛的な建築が必要になってくるわけです。

## 栄昌楼の空間構成と生活

永定県で僕らがぼったり会ったおばあさんに連れられて行った土楼は、栄昌楼というものです[図23]。許可なく行っていますが、入って行って、僕たちがこういうものを調べたいと言ったら、みんな喜んで出てきて、どうぞという感じでした[図24]。もう夢のようでした。

建物の外側は非常に硬くて、とても攻めていけそうもないでしょう。ここにも板戸がありますから、明らかに軍事的建築です。ここから鉄砲で撃たれて、門を閉められたらどうしようもないです。ほとんど攻めようがないです。

ただ、孤立したらここで生活できるのかという観点で中に入りますと、実は内部はすごく軟らかくできています。1階の外側にキッチン兼食堂、居間のような場所が並んでいて、その外側が長屋の路地のようになっていて、円の真ん中が共同施設になっています[図25]。その間にニワトリがたくさんいて、ここにかまどがあるでしょう。かまどはこのようになっていて、支那鍋がぼんと掛けられます[図26]。こういうところで食べたり話をしたりお茶を飲んだりします[図27]。ここでご飯を食べると、ぼろぼろ落ちたご飯をとニワトリがついばむという、僕はスーパーエコロジーだと言っていましたが、そういう不思議な空間です。これが実にいいわけです。このおじいちゃんがこうやって食べこぼすと、ニワトリがちゅんちゅんやってきて[図28]、こいつらも最後には食われてしまいます。中庭には井戸もありますから[図29]、孤立しても水は大丈夫です。



【図23】



【図24】



【図25】



【図26】



【図27】



【図28】



【図29】



【図30】

生活空間は垂直に機能分化しています。均霑思想<sup>きんてん</sup>に基づき、みんなが平等であるようにつくられています。それから、各層の用途が違います。2階は大概倉庫になっていて、3階に寝室があります。これは3階の個室の中を撮影した写真です【図30】。こういうふう<sup>マートン</sup>にベッドがあって、机があります。ここに窓がありますが、要塞のようにつくられているので、窓も木でふたができるようになっています。

家族の部屋の割り方はこのようになっています【図31】。不思議なのですが、例えばこれがAさんの家だったら、Aさんの居間の上にAさんの倉庫があり、さらにその上にAさんの寝室があります。であれば、家の中に階段があればいいと思うのですが、そうではなく、階段はこの円の中で大体1個か2個しかありません。どうしてこのような不便なことをするのか、実に不思議です。だから、否が応でも共同性が非常に強いです。

これは4層になっている土楼です【図32】。このようなものもあります。

1階中央部分、3階、4階の居室部分のプランです【図33】。夫婦はダブルベッドですが、あとは1人1ベッドというかたちです。

寝室の廊下を見ると、実に整然としています【図34】。しかし日本人と違うと思うのは、廊下を見ていくと、これ以上頑丈なものがあるかという感じの南京錠<sup>かめ</sup>がば一つと掛かっています。だから、日本の長屋や漁村集落で戸を立てないという感じではありません。これが非常に不思議でした。民族性の違いかなと思います。

廊下の外側には糞<sup>かめ</sup>や水が置いてあったり、野菜やお茶を干したりしています。一方で、これは尾籠<sup>びろう</sup>な話ですが、中国の場合、上海でも北京でも、最近まで便所がありませんでした。うんちでもおしっこでも、おまるにします。ですから、夜は廊下に出しておきます。都会であれば、朝になったら共同便所に持って行くのですが、そういうところを持って行って肥料にします。大概ブタの餌になります。だから、僕

がこの時代に上海などで生活して同済大学に通った頃、朝早く路地に行くと、おまるを竹串のようなもので洗っていましたが、不潔だという印象はありませんでした。大体、この調査をしたときは僕たちも便所のないところで生活していましたから、何ということはないと思っていました。

しかし、これだけでは生活できないので、外にバケツや食卓などいろいろなものが出てきます【図35】。上の階に行くと、こういうふうになっています【図36】。馬桶<sup>マートン</sup>というものがおまるです。居室には机があったりしますが、何しろこの頃は、カセットラジオはあるけれども、電気は通っていないところが多かったですから、テレビはほとんどありません。電気はもちろん、水道や電話もありませんでした。

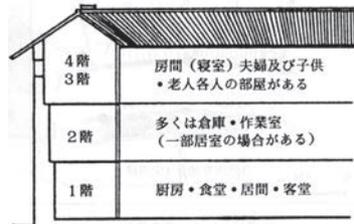
3階はこういうふう<sup>マートン</sup>に持ち出しのところがあって、そこにまたいろいろなものを収納しています【図37】。それから上側にオーバーハング<sup>マートン</sup>※7していますから、物を上げたり下ろしたりするのはみんなロープで吊るします。非常に合理的な仕組みだと思いました。

外側は版築の壁で、外壁は日干レンガを積んでいるという構造です。実に精緻につくられています。

※7 下の階よりも上の階が張り出していること。

C	B		A	A	E		
D	C	B	A	A	E		
D	C	B	A	A	E	E	

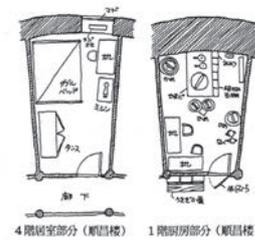
図9 円型土楼の空間所有区分別



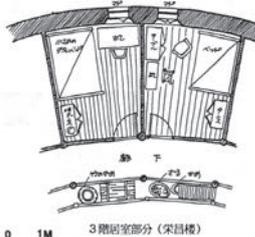
【図31】



【図32】



4階居室部分(順昌楼) 1階居室部分(順昌楼)



3階居室部分(栄昌楼)

【図33】



【図34】



円形土楼の社会的構成と空間的構成

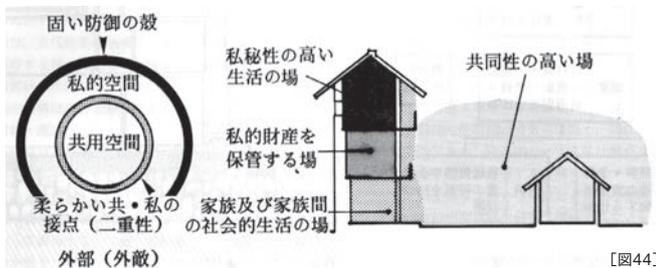
次の表をご覧ください[表1]。ファンジェンという3階の生活するところでは、睡眠、排泄、着衣、家事、学習、くつろぐ。倉庫では財産の管理が、厨房では食事、調理、団欒、交際、来客、応接など。走馬廊というのは僕らが勝手に付けた名前ですが、そういう縁側のようなところには大小使用の壺、馬桶を置いたり、物の保管、洗濯物干し、野菜干しをします。1階の廊縁に行くと、洗面、散髪、家事、皿洗い、農作業、憩い、小動物の世話、音楽鑑賞や通行、交際など。院子という中庭でもいろいろなことが行われます。この頃は映画を映したりしていました。祖堂では、先祖崇拜、年中行事、祝祭、物の保管といったことが行われています。

空間構成の模式図です[図44]。固い防御の殻があって、私的空間があって、共用空間があって、中は軟らかい。それから、上に上がるに従って私秘性が高くなっています。

	空間的構成							
	Private Closed				Common Open			
	房間	倉庫	厨房	走馬廊	廊縁	院子	祖堂	祖廟
一居住者	核家族 (例: 張さん夫婦+子供一人)	睡眠 排泄 着衣 家事 学習 くつろぐ			洗面 散髪			
社会的構成	家族 (+両親夫婦+張さん兄弟二人)	財産の保管	食事調理 団欒	大小使用の壺を置く*1 物の保管 洗濯物干し 野菜干し	家事(皿洗) 農作業*2 憩い 小動物の世話*3	農作業 水汲み 物の保管		
樓社会	樓社会 (順昌樓)		交際 来客 応接	通行	音楽鑑賞 通行 交際	物の保管 交際 冠婚葬祭	先祖の崇拜 年中行事 祝祭 物の保管*4	
集落	同族の集落 (塔下)				映画 交際 宴会		先祖の崇拜	

- \*1 走馬廊より中庭側に向かいキャンチレバー状に突き出た「半舎」があり、壺はここに置かれる。
- \*2 農作業には、野菜を干す・もみを干す・竹細工をする・家畜を飼う等の内容が含まれる。
- \*3 中庭には家族のもつ倉庫、共同で使う倉庫が建っている。
- \*4 祖堂は日常時に物の保管や作業の場所となっている。

[表1]



[図44]

円形土楼の構造と木組み

もう一つ、この建築のすごいところは、土壁については後で説明しますが、版築、つまり土を積み重ねて、突き固めてつくっています。一方で、スラブ※9は木組みで持っていますが、通し柱※10はありません。

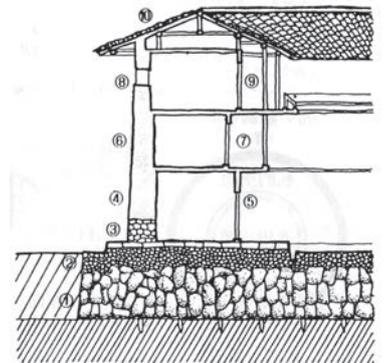
これは不思議です。柱貫構造で、通し柱のないバランス構造になっています。

この図[図45]では左側に壁があって、そこに梁を引っ掛けるだけで、あとは木でできていきますが、それが円になっているから崩壊しません。そういう不思議な造りになっています。それで版築と日干しレンガ、木軸、瓦でつくっています。

福建省は今でも森林が多いけれど、昔はもっと森林が多かったと考えられるし、気候的には日本の照葉樹林分布帯と同じです。だから木材が非常に潤沢で、昔の西表島のように森しかない、隙間が見えないぐらい木があって、いくらでも木が切れる状態だったと思います。それで、木構造が非常に発達します。四川省の方に行くと、これがさらに洗練されたような建築がありますが、ここも潤沢に木があります。

1つ面白いのは、この柱と貫の構造で木組みをつくりませんが、これ[図46]は東大寺南大門や浄土寺浄土堂をつくった東大寺の別当※11である重源が持ち込んだ天竺様です。南大門様式と福建省の建築は酷似しています。黄漢文という人が中国建築学報でたくさん論文を書いています。柱貫構造による木組みが非常によく似ています。

- ※9 建築物の床の荷重を支える構造床。
- ※10 二階建て以上の建築物において、土台から軒まで通った継ぎ目のない柱。
- ※11 寺務を司る官職。



[図45]



[図46]

## 永定県から南靖県へ

実は初日にこのように調査をしていたところ、僕は公安警察に見つかり、「ここは許可していないので出ていってください」と言うので、僕は「ああ、そうですか。まずここに一晚泊めてください」と言いました。それから工作証を見せて、「明日出ていくということでどうですか」と聞いたら、「明日出ていくのだったらいい」と言うので、もう1日調査できることになりました。

しかし、翌日のうちに出なくてはいけなくて、翌日の晩、漳州という町に行くことになりました。それで漳州の公安局に交渉したら、最初は良いと言われたので行こうとしたら、しばらく経ってから警察官が追いかけてきて、上司に聞いたら不許可だったと言われて、非常にながかりしました。それで学生たちは「先生やめましょう、もう1棟調査したからいいではないですか」と言うのですが、僕は「絶対にもっと調査したい」と言って、先ほどの親切だった警察官にもう1回会いに行き、「許可してくれそうな場所はあるのか」と聞いたら、「南靖県に行ってみなさい」と言われました。「良いかどうかは分からないけれど、そこは不許可地区ではないから行ってみたいらどうか」と言うので、南靖県に向かいました。

それで南靖県に行く道はまたすごく遠かったので、みんなが「またどうせ駄目ですよ、福建省にはおいしいものもいろいろあるし、良い建築もたくさんありますから、そちらに行けばいいではないですか」と言っていたのですが、着いてみると、南靖県の役所には花畑や池があって、いろいろな建物がたくさんあり、その中で僕らは文物室に向かいました。文物室というのは文化財委員会のことです。「きっとこの中で一番きれいな民家が文物室になっていて、その室長は美人の女性だよ」と僕が言ったら、みんなが「ええ」と言いながらついてきましたが、行ってみたいら僕の言うとおりで、花畑の真ん中に小さい民家があって、そこが文物室で、室長は美しい女性でした。

室長からは「よく来ました。みんな永定県に行きたがるけど、ここにもこういうものがあります」と、土楼のある集落を紹介されました。それで僕は「できれば図面が欲しい」と言ったら、「図面は外国人には見せません、複写もできません。ただ、今あなた方がご覧になるのはいいです。隣の部屋に広げておきましたから、どうぞ見てください。私は1時間したら戻ってきます」と言われたので、僕はトレペをかけて、それを全部コピーしました。

## 南靖県の集落調査

それで南靖県の文物保護室の紹介で、南靖県書洋郷シヨウヨウジャンという集落に行きました。そうしたらまたここが非常に山の中で、ウーロン茶しか作っていないようなところでした。雲がたなびく中[図47]、何だあれはとぎょっと驚きました。ここの中腹には円形土楼が5つもありました。それで何とかたどり着こうと思って行きました。電気も水も電話

もないところで、自動車では途中までしか行けません。ここから上の方に上がって、上からのぞき込んだら、こういう集落があるのです[図48]。

ここを調査したいので、畑を耕していた人とにかく交渉しました。そうしたら、叫び声通信のようなことをするんです。要するに、日本人が来たぞ、「日本人来了」などと言います。遠くから「日本人来了」と返ってきました。それで、何人来たんだリーベンレンライラ「几个人」と聞かれ、「ドライバーを含めて7人です」と僕らの人数を言って下りていくと、7人分の食事とお茶が用意されていました。それでやったという感じで、この集落を調査することになりました。

これがまた不思議な角形土楼と円形土楼と楕円形土楼からなる集落でした[図49]。この前、松永安光さんがこの集落にツアーで行ったときのことをFacebookに書いていたので、「そこは僕が発見しました」と言ったら、コロンプスがアメリカインディアンを発見したかのような言い方を批判されたので、「いや、そういう意味ではない。専門家として初めてこれを実測したのが僕だという意味ですよ」と言いましたが、とにかくここは素晴らしいところでした。

プランを書いてみるとこのようなところカミカワです[図50]。上坂村というところ。この辺りでの唯一の文明はこのガーデントラクターです[図51]。これが自慢で、こういうものがあるぞと見せられて、すごいですねと言いましたが、これしかないです。この人が共産党の書記で、おそらく文革の後にこういう若者がリーダーシップを取ったのが良かったのでしょう。その人の娘がこの美人の子どもです[図52]。僕たち外国人が来たので、みんな最高のおめかしをしています。周りにはあるのはタバコです。タバコとウーロン茶が換金作物です。この人は工人服のようなものを着ていますが、盧辛明という私の研究室の博士課程の学生です[図53]。

それでももう汚いんです[図54]。ブタのおしっこやうんちが散らばっているところを、長い竹を割ってつないだ竹ざおで測って、それをまたメジャーで測り直して、全部測量しました。これは今、うちの研究室の人たちが測っているところカミカワです[図55]。それで図面を取りました。

ただ、ここは素晴らしいドラマチックな空間でした。空が切り取られると楕円ですから、素晴らしいんです[図56]。

この写真[図57]に写っている人は書記です。カッコいいでしょう。その隣が僕と長老です。

これがプランです[図58]。こういう図面を作るのも、今だったらGPSがあるから簡単にできますが、当時はGPSがないので、文物室で写させてもらったすごくアバウトな等高線に、僕らが山勘でプロット図を描いていきました。だから今、航空写真やGoogle Earthで見たら、少し違うのではないかと思います。



【図47】



【図48】



【図56】



【図57】



【図49】



【図50】



【図58】



【図51】



【図52】



【図53】



【図54】



【図55】

### 版築の起源、つくり方

土楼の土壁は版築でつくられています。版築とは何かというと、ユーラシア大陸に普遍的な土構造の壁で、お月さまにいるウサギが持っているきねを細くしたようなもので土を突っていきます【図59】。その結果、バウムクーヘンのように薄く突き固めていくと、人口的な堆積岩になります。

実は日本にもこれはありまして、龍安寺や法隆寺の土塙、岡山の吉備津彦神社など、社寺の基壇にも使われていますが、今はもうほとんど使われていない技術です。

ところがこれは世界中にありまして、例えばフランスでも版築が使われています。版築是北京語だと「パンツ」と読みますが、フランス語だとピセと言います。フランス語の専門家に聞くと、こういう短い言葉でできているものは相当古いベーシックな言葉だから、すごく前からあったはずだと言います。中国起源なのか、あるいはローマ人が広めたのか、いろいろな説があるそうで、ヨーロッパはもちろん、アフリカや西アジアにもあります。

それで面白いのは、中国でもアフリカでも道具が同じなんです。つまりこういう板を2枚立てて、こうやって固めてしまいます【図60】。上から土を入れて突っ込んでいくにつれて、下が締まるという仕組みです。上からこれをたたいて、ある程度締めたら、これを一個一個突き固めていきます。よくこんな気の遠くなることをするなと思います。中に何かを入れたいときは、間伐材を芯に入れる場合もありますが、これは本当にそうなのか、少し怪しいです。僕らが見たものでは、このようなものは入っていませんでした。このように入れるのか、それとも

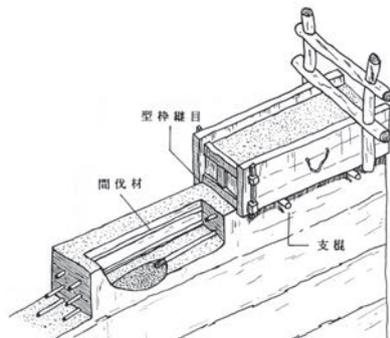
どこか接合部だけに入れるのかはよく分かりませんが、僕らが見たものは単に突き固めているだけでした。こういう道具でつくっています[図61]。不思議な道具で、この棒が下に行けば行くほど、上が開いていって、下が締まるという仕組みになっています。

円形土楼は、僕が行った1986年にはもうつくっていませんでしたが、版築で建築をつくることはやっていました。アパートのようなものを、こうやってつくっています[図62]。気長に日がな一日つづいて、何カ月か経つと3階建てくらいの壁が出来上がってきます。

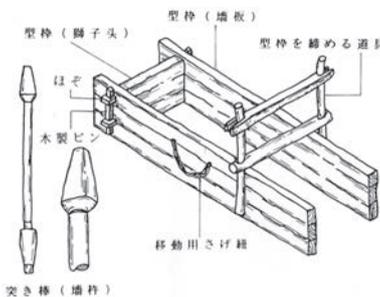
僕らが調査していた頃につくっていた版築建築は、このようなものです[図63]。それで土楼の周囲に、こういうふう近代化された版築建築が建っているわけです[図64]。



【図59】



【図60】



【図61】



【図62】



【図63】



【図64】

### 巨大な円形土楼「順裕楼」

こういう巨大な土楼もつくっています[図65]。順裕楼というのですが、直径70メートル、中庭の径60メートルです。僕らが見た中で一番大きい楼でしたが、世の中にはもっと大きい楼がもう1個ぐらいあるそうです。これは本当に東大寺様式のようなですね。順裕楼は標高400~500メートルの場所にあり、1934年ぐらいにほぼ完成しまし

たが、まだ中がうまく埋まっています。最初にお見せした榮昌楼は直径34メートルなので、非常にコンパクトですが、順裕楼は広々としています。

それからこれは文昌楼という楕円形土楼で、長い方が40メートル、短い方が30メートルです。



【図65】

### 角形土楼と円形土楼

もう一つ、円形土楼のある集落とは何なのかという問題があります。角形土楼と円形土楼がありますが、円の方が合理的です。

例えばこの集落を見ますと[図66]、鎮守の森と書いてありますが、南と北に集落があります。川沿いはほとんど四角ですが、要所所に丸いものがあります。ここには廟があって、どうも円の方が非常に大事な建築だという意識があるのと、四角い楼から円が発達したのではないかと思います。このような配置になっています[図67]。

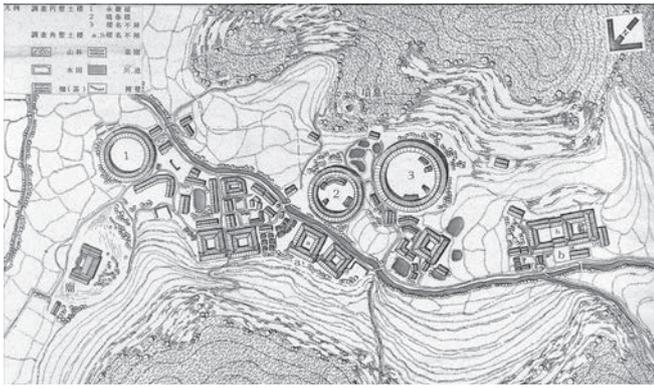
これは塔下と河抗というところで、これは上坂と下坂の土楼の配置図です[図68]。

角形土楼のできかけのようなものを見ると、やはり四合院のような発想でつくられているように感じます。角形だと、上座と下座ができます。それから角がすごく弱くなります。円形には上座、下座ができない、そういうヒエラルキーがないのです。なおかつ、ぐるっと丸くなることによって、すごく丈夫になるという利点があります。

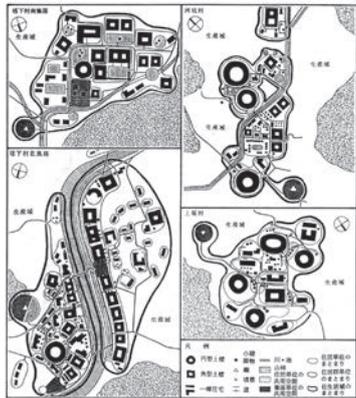
角形土楼の問題がもう1個あって、角にデッドスペースが生じます[図69]が、一方で正面が南を向くと、すごくいい場所になります[図70]。



【図66】



【図67】



【図68】



【図69】



【図70】

**集落における共同組織**

これらは僕らが1986年に行ったときに聞いたことですが、この円形土楼【図71】は1970年頃までつくられていました。そこに行って、そのときの組織をきちんと聞くと、共同組織があって、一種のコーポラティブであると言うのです。集落の中で円形土楼をつくらうという人たちが生まれて、参加する人はいないかと募ると、労働力と金を出す人が応募してきて、みんなでコーポラティブでつくります。それで風水師に場所を選んでもらったり、井戸や入り口の位置を決めてもらったりして、プロとアマで建設組織をつくります。主なチームは大工ダーゴンといって何でもやる建設部隊ですが、本当に細かい木工は木工ムーゴンというグループがやります。左官の仕事はほとんどありませんが、瓦や水回りなどは水泥工スイーゴンがやります。このようにプロが少し入った自力建設でやります。お金の配分は非常に合理的に均等に、みんなで話し合っってバランスを取りながら配分していきます。

面白いのは、みんながスケルトン※12分譲の状態※13で自分の家を手に入れます。インフィル※13は各自が埋めていきます。こういうふう

ケルトンの状態【図72】、そこにパーツを入れて居住性を高めていきますが、この順裕楼は1930年につくったのに、まだここにスラブがなかったりして、未完成の部分が残っています。本当に気長な民族だなと思います。また、全体が統一されているけれども、多様性も生まれます。こういうことを聞くと、ルシアン・クロール※14のようにではないかと、ますますこれに、ほれてしまうわけです。

組織【図73】内では、同族の中から総理を決めます。総理は組織のリーダーで、建設全体を統括し、責任を負う人です。この人は精神的リーダーで、やりましょうと声をかける人ですが、実際に事務のできる番頭さんのような人を探します。資材調達、連絡、食事の準備、雇用管理をするマネジャー、頭家トウジャです。その下にお金を計算する会計がいて、この人たちが具体的な計画をつくります。一方で、実際のお金の出し入れは出納係がやります。金庫番です。それで会計のもとに、水土工以外にも大工の小隊が幾つつかつられていき、木工部隊や瓦、左官はお金を払って外から呼んできます。

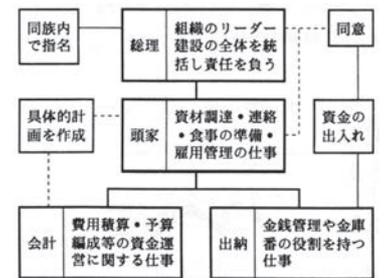
※12 建築物を支える柱・梁などの構造躯体、あるいは内装や設備がない状態。  
 ※13 構造体以外の内装や設備、間仕切りなどのこと。  
 ※14 1927年生まれ、ベルギーの建築家。住民参加の手法を取り入れながら集合住宅などの設計を行った。



【図71】



【図72】



【図73】

**円形土楼から学ぶこと**

最後に、円形土楼から何を学ぶのかをまとめると、1つは企画から建設工事までコーポラティブ方式でつくる、それが素晴らしいです。2つ目は、資金や労働力、空間配分、運営などに水平性があり、均霽思想に基づき、みんなが均等になるようにつくられています。3つ目は、スケルトンは共同で、インフィルは自己責任で施工します。4つ目は、エコロジカルな地場自然素材を使い、専門家と住民が協同作業を行うところも素晴らしいです。そして何よりも美しい景観と、劇的な空間があります。

ご清聴ありがとうございました。

# DISCUSSION

山家京子(神奈川大学工学部教授)

石田敏明(神奈川大学工学部教授)

須崎文代(神奈川大学工学部特別助教)

**山家** ありがとうございます。それでは皆さんから質問などがありましたら、お受けしたいと思うのですが、いかがでしょうか。

**石田** 興味深い話をありがとうございました。先ほど紹介された70mや40mの土楼は、いろいろなサイズがあると思いますが、居住者数あるいは世帯数は、ある程度、基準になるようなものがありますか。コーポラティブという話がありましたが、何人ぐらいが適正なのでしょう。

**重村** 普通に考えると50~60世帯がマックスで、小さいものは20~30世帯です。

適正人数については、少なくともその組織の中で、何人ぐらいが適正だからこの大きさにしようという感じではないようでした。ただ見ていると、マックス数十メートルで、平均して40~50メートルぐらいの土楼がつくられています。それは場所の問題もあるし、そのときに住宅を求めている住宅困窮所帯というか、ユーザー数で決まってくると思います。多分、1個で足りないと思ったら2個つくることになり。だから、どちらかという土地や建築の規模の限界など、ハード面で決まると思います。

**石田** 位置は最初に風水師に見てもらって、まず井戸というか水源を見つけて、この場所につくろうということになるのでしょうか。

**重村** 分かりませんが、多分この人たちが住んでいる場所は、井戸を掘れば水が出る場所なのではないかと推測しています。だから円の中のどこに井戸をつくるためかということに、風水師は命をかけているのだと思います。風水ですから、一つ一つの配置に名前があります。一番有名なのは背山臨水です。この配置はこうだからこうだというふうに言うと、みんなが納得するのだと思います。

調査の際、そういうことをどうやって決めるのかと聞いたら本当に風水師が出てきて、その人に質問すると、羅針盤を出してすごく誇らしげでした。そのときに僕がスウェーデン軍のコンパスを持っていたので、それを見せたらものすごくうらやましがっていました。彼らからすると、コンパスを操るだけでもすごい人なのだと思います。

**山家** 円形土楼は防御のためにすごく完結したかたちになっていま

す。一方で、幾つかの集落を見せていただくと、円形土楼が幾つかあったり、その間を埋めるように角形土楼があったりします。生産域を従えているなど、必ずしも一つの円形土楼で完結しているわけではないのでしょうか。

**重村** 円形土楼では完結していませんが、敵が攻め込んできたときに、角形土楼も円形土楼も全て防御系になります。平たいものは防御系になりません。おなかをさらしてしまっている感じです。だから本当に武闘を繰り広げたときは、みんなが中にもこもって、外にいる人に向けて火矢や鉄砲を撃ったようです。それで高松城の水攻めのように包囲戦を耐えしのいでいると、だんだん敵がくたびれて帰っていくということではないかと思います。

**山家** 中庭について、もともと祭祀のための空間であったものが、文革以降は生産空間になっているとのお話がありました。そうすると、中庭を見ると建設時期が分かるのでしょうか。

**重村** 中華人民共和国になってからは祀りごとが禁止されたので、中国中の廟がつぶされてしまいました。僕の想像ですが、古い円形土楼の中で祖堂が残っているようなものも、1回はなくなったのだと思います。ただ空間が残っていたから、容易に復活できたのではないのでしょうか。

面白いのは、浙江省の紹興市に蘭亭・鳶池があり、そこは書道家の王羲之が滞在中に曲水の宴<sup>※15</sup>を催していたところ。そこに康熙帝や乾隆帝の書などが石碑に残っています。僕は「このようなものが文化大革命のときにどうして壊されなかったのですか」と聞きました。そうしたら「重村さんはいいことを聞きますね。我々は何千年も生きてから賢いんです。北京で文化大革命が起きた途端に石こうを買ってきて、そういう批判されそうなもの全てに石こうを1センチの厚みで塗って、その上にペンキを塗って、毛沢東語録を全部書きました。そうしたら紅衛兵が来ても何も壊せなかった」と言いました。そういうことをやって生き延びてきたのではないのでしょうか。

**須崎** 大変興味深いお話で、いろいろ伺いたいことがありますが、なかでも今回ご紹介いただいた土楼建築が、共同的な生活を実現するための共同住宅であるという点に関心を持っています。家事労働(例えば炊事や洗濯場など)の共同化のための空間、施設あるいは場所は、土楼の内外にあるのでしょうか。

**重村** どこかでやっていたのかもしれませんが、そういうものは見つけられなかったです。現代中国は人民公社<sup>※16</sup>など、生産手段の共同化や社会化などいろいろなことをやってきたので、そういう共同炊事

場や共同洗濯場、例えばみんなで洗濯機を1台買ってみんなで使うだとか、そういうものがありそうですね。ところが、僕が中国中を旅行しても、そういうものを見たことがありません。

日本の社会主義では、例えば浦辺鎮太郎<sup>※17</sup>の仕事の中で、倉敷レイヨンの労働者たちが協同組合のような活動をしていたことが見えますが、中国ではどこかにあるのかわかりません。

映画監督のチャン・イーモウの映画は全部素晴らしいので見たらいいと思いますが、『初恋のきた道』など、中国の革命初期の農村生活を描いた作品がたくさんあります。それを見ても、そういう生活の細部を共同化するものは見えません。今でも中国はそうですね。そういうものは日本や北欧のほうがすごいかもしれません。

**須崎** 水源だけ共同にして、あとは各自で持ち帰って家事をする感じでしょうか。

**重村** そうですね。あとすごいものがあるとすれば、円形土楼に限った話ではありませんが、路地ごとに全部居民委員会があって、路地の入り口で誰が入ってくるかを見張っています。それで時々、唾を吐くなどか注意しています。ですから、1980年代に僕らが生活していたときは、居民委員会にすごく気を遣っていました。

**須崎** 過去には日本でも「痰壺条例」が設けられて、唾を吐くことについて規制されていたことを思い出します。

**重村** そういうことを叫んでいる人たちがいます。その人たちがまた、今は精神文明を昂揚するときだとか一生懸命書いたりするわけです。最近はそのようなものは減んだと思っていたら、この前の武漢のコロナの問題で、路地に入る人を全部シャットアウトしてチェックしていました。あれは居民委員会の発想だだと思います。だから、そういうコントロールをすることは見たことがありますが、家事労働を社会で分担するというのは、僕は見たことがありません。

どちらかというと、例えばこういう感じですか。重村家に須崎ファミリーがお客に来ます。ところが重村家には料理がうまい人が全然いません。そうすると、隣の山本家から料理の上手なおじさんが来て、全然関係ないのですが、まるでこれはうちの弟だと偽って協力してくれたり、控室を提供してくれたりして、後でお金を払うということは上海でたくさん見ました。

**須崎** 実際、家事労働の分担は、目にしたことがありませんが、健康体操のサークルやニーハオトイレは共同的に運用されているようですね。

**重村** ああいう汚いトイレですが、ここはみんなで洗いましょうと竹串のようなものでじゃーっと水で流したりして、あなたが当番だとか、そういうノルマはあるようです。

その辺の話は、『人、中年に到るや』という小説に書かれています。中国語では『人到中年』<sup>レントオチュンレン</sup>といいますが、インテリのお医者さんが現代社会に適応しようとしても、生活においても職場においてもみんな手抜きする中、その人だけは真面目にやっていて、結局心臓まひで死んでしまうという悲しい話です。薄い文庫本なのであつという間に読めますが、生活がよく分かります。それを読んでいても、日本のような共同生活はないなという感じですが、そういうノルマはあるようです。だから、それが中国の社会主義の弱みだと思います。

**須崎** もう一つ質問があります。画面で見せていただいた断面図では、基礎の部分が外部の地盤面から1段上がって、中庭がまた1段下がるという竪穴式住居のようなGL線<sup>※18</sup>が見られる断面形状だったことが、興味深い形態だと思いました。一方、現実的な側面として、衛生面も含めて雨仕舞<sup>※19</sup>はどうなっているのかが気になりました。中庭から外に排出するのでしょうか。

**重村** まず土楼自体が周囲に対してすごく高いところにあります。だから中のグランドレベルは相当上にあります。中庭に排水溝のようなものがあって、それは外よりも高いのです。

**須崎** 基壇の部分が割と粗い石だから水が抜けやすくもあるのでしょうか。あまり水溜まりしなさそうな構造に見えます。

**重村** そうですね。ただ、中国にしては雨が降ると思います。

**須崎** 確かに、建物の周辺は稲作が行われているように見えました。

**重村** お茶もできるような場所ですから、すごく日本と似ています。ただ、ここでもらったウーロン茶ほどおいしいお茶はなかったです。

**山家** まだまだお話は尽きませんが、本日のレクチャーはこれで閉じさせていただきたいと思います。重村先生、どうもありがとうございました。

※15 曲水(曲がりくねった小川)のある庭園で、その流れのふちに出席者が座り、流された酒盃が自分の前を通り過ぎるまでに即興で歌を詠み、盃を飲み干してまた次に流すという宴会。

※16 かつて中華人民共和国において農村に存在した組織。一郷一社の規模を基本単位とし、末端行政機関であると同時に集団所有制の下、工業、農業、商業などの経済活動のみならず、教育、文化、軍事の機能を営んだ。

※17 1909年岡山県生まれ、建築家。倉敷レイヨン入社後、同社内に倉敷建築研究所を設立。「倉敷国際ホテル」「倉敷アイビスクエア」で日本建築学会賞作品賞受賞。

※18 Ground Levelの略称。地盤面の高さ。

※19 建築物の屋根や外壁からの雨漏りを防ぐために、雨水を適切に処理し、排水させること。

---

**Vol.1**

客家の円型土楼 ― その建築様式と集住の知恵

講師: 重村力 (建築家・工学博士)

日時: 2020年11月9日

---

**Vol.2**

ハンドメイド・アーバニズム

講師: 尹柱善 (建築都市空間研究所まち再生センター長)

日時: 2020年12月7日

---

**Vol.3**

台湾における都市の歴史的環境保全

講師: 藤岡麻理子 (横浜市立大学グローバル都市協力研究センター特任助教)

日時: 2021年2月1日

---

**Vol.4**

「竹」の活用で1分の1から、1万分の1まで ― カレン集落の再生プロジェクト

講師: Terdsak Tachakitkachorn (バンコク チュラロンコン大学建築学部 Assistant Professor)

日時: 2021年2月22日

---

**Vol.5**

ベトナム・ハノイ 変化する都市の文化遺産

講師: 柏原沙織 (東京大学大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻 特任助教)

日時: 2021年7月20日

---

**Vol.6**

ベトナム・サイゴンの建築と都市の文化

講師: 李暎一 (一般社団法人アジア建築集合体 会長)

日時: 2021年8月25日

---

**Vol.7**

メトロマニラにおける参加型社会住宅 People's Plan: 参加の価値の再考

講師: 白石レイ (山口大学大学院創成科学研究科 准教授)

日時: 2022年3月2日

発行 神奈川大学アジア研究センター  
〒221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1 電話: 045-481-5661

デザイン 丸山智也、野中優衣 (マルヤマデザイン)

編集 吉岡きくみ

2021年3月22日発行